

マタイ2章1-11節 「東方からの賢人」

1A インマヌエル(臨在)

2A 罪から救われる方(贖罪)

3A ユダヤ人の王(選ばれた方)

1B 東方(呪われた地)

2B 賢者(信じる者)

3B 導く星(希望の栄光)

4B 礼拝(力と富の移譲)

本文

今朝の聖書本文は、マタイ2章1-11節です。

1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」3 それを聞いて、ヘロデ王は恐れ惑った。エルサレム中の人も王と同様であった。4 そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。6 『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』」7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。8 そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。11 そしてその家にはいって、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。

私たちは、イエス様がお生まれになって羊飼いがイエス様を拝みに来たところを聞きました。そして今、読んだところは、イエス様が生まれてから二年近く経った時のことです。後でヘロデが、ベツレヘムにいる二歳以下の男の子をすべて殺せという命令を出します。東方の博士たちが星の出現を突き止めた時間からヘロデが割り出した、とあるからです(16節)。場所も、家畜小屋ではなく「家」です。しばしば、イエス様がお生まれになった場面に、家畜小屋に羊飼いと三人の東方の博士が生まれたばかりのみどり子を拝しているものがありますが、それは間違っています。ルカ伝では生まれたばかりの赤子で、マタイ伝では二年近く経っているイエス様です。

私たちは明日、クリスマス会を行います。そこでは、教会に普段は足を運ばない方々にも、クリスマスの意味を知っていただきたいという思いで行います。けれども、クリスマスの元々の意味は、「キリストのミサ」すなわち、「キリストを礼拝する」ことでもあります。そして、キリストがお生まれになった時にこの方を礼拝した人々は、元々、この方が来られると切に待ち望んでいた人々でありました。つまり、心備えができていない人であれば、真の意味でクリスマスを体験できません。ですから、クリスマスの行事で忙しくするのではなく、むしろ心を静めて主のご降誕の意味について思い巡らす姿勢が必要です。

イエスがお生まれになった時、その真意を受け止めた人々は、みな正しい人たちでした。イエスの両親、ヨセフとマリヤがいます。聖霊によってマリヤが身ごもった時に、彼らは天使の言葉に従順でした。もし心備えができていなければ、そのようなことを唐突に言われても、聞き従うことができなかつたはずです。そして、パプテスマのヨハネの両親ザカリヤとエリサベツも、キリストの到来を待ち望む敬虔な人たちでした。また、イエス様がエルサレムの神殿に連れて来られた時に、その子を見て慰めを受け、預言をしたのは年老いたシメオンまた女預言者アンナです。

そして、今、私たちが読みました「東方の博士」のエルサレム訪問は、全く驚くべき出来事です。なぜなら、彼らはイスラエル人ではないからです。後で詳しく説明しますが、あまりにも遠くに離れた、むしろ神から呪われていると宣言を受けている東方からやって来ています。その彼らが、星を突き止めて、ユダヤ人の王として拝みにやってきました。

1A インマヌエル(臨在)

何がクリスマスを特別なものにしてしているのでしょうか？単に「イエス様が生まれた日」とだけ言っても、実は正しくありません。その言葉だけを聞いたら、二千年前にベツレヘムでイエスという人が生まれたという事実だけしか伝わらず、他の大勢の赤ん坊と全く違った意味を持っています。それは、「天地を創造された、永遠に生きている全知全能の神が、人の肉体をもって現れた。」ということです。神が人のど真ん中に介入された人の姿を取って来られた、ということです。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。・・ことばは肉となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:1,14)」これを神学の用語で「受肉」と言います。肉体を受けた、ということです。

マタイ 1 章 22-23 節を見てください、先ほど読んだ 2 章の手前です。「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)」インマヌエル、神が私たちと共におられるということです。これは比喩的な意味ではなく、文字通り、処女から生まれた赤子のイエス様が、天地創造、万物を創造された神ご自身であったという意味です。神であり、かつ人であった方です。

イエス様は一度、弟子にこう言われました。「わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ 14:9)」ヘブル書 1 章 3 節には、「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われで」ある、とあります。また使徒ヨハネは、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。(ヨハネ 1:18)」と言いました。神が人となられた目的の第一は、神が人にご自分がどのような方かを、はっきり示すためでありました。

私たちは、自分の思いの中で神はどのような存在かを思い描いています。ひげをはやしたおじいさんなのかな?とか、または、天と地を支配しているけれども、地震や津波で人を死なせるような酷い方であるとか、一生懸命呼び求めても一向に答えをくださらない方であるとか、いろいろ想像しています。

けれども、はっきりしたことが言えないので曖昧なままになっています。そこで、人は目に見えるように神を形造ります。それが偶像、木や石や、金銀で造られている像です。目に見えない存在よりも、目に見える頼れる存在が欲しいのです。けれども、その像が何か話すわけではないし、自分の祈りを聞いてくれるわけでもありません。そして、木や石の偶像ではなくても、ある憧れる人であるとか、自分の能力を鍛えてそれを信じるとか、何か目に見えるものに拠りすがろうとしています。

けれども、本当に拠り頼むことのできる存在は、造られたものではなく、造られた方です。世界を造り、この自分を造られた方に拠り頼むことこそが、私たちを満足させます。自然を見れば、神のすばらしさが分かります。天体の星の動き、そして自然界の不思議、また人体もそうです、どんなに科学や先端技術が発達したと言っても、そのような秩序と精密な構造を決して作り出すことはできません。自然界が神のおられることをはっきりと証明しています。

けれども、それだけでは足りません。自然には、神の人格、パーソナリティーが見えません。けれども神は知情意を持った人格者です。神は考えるし、神は計画するし、そして神は言葉を話すし、神は悲しまれるし、喜ばれるし、何よりもご自分の造られた物を愛し、慕っておられます。そこで神は、この終わりの時にご自分の本質を御子の中に完全に現してくださいました。もし、神が自分に酷いことをしていると思ったら、福音書に書かれているイエス様を見てください。自分の思い描いている神が、まことの神、本物の神といかにか離れているかを知ることでしょう。

そして受肉の二つ目の目的は、「人と一体になる」ということです。天におられて、全知全能であり、この宇宙よりも大きい無限大の方が、どのように今、風邪やその他の病気で悩んでいる人に同情できるのでしょうか?会社の激務で頭がストレスでいっぱいになっている人の気持ちが分かるのでしょうか?そこで神は肉体を取られました。「…主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。…主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。(ヘブル 2:17,18)」私たちの肉体にある弱さをすべて知っておられます。そのことによって、神は人と一つになることができました。

私たちが蟻に何か良くしてあげたいと思っても、蟻にはそのことは伝わりません。蟻に自分が気にかけていることを伝えるには蟻になるのが最も効果的です。神は同じことをしてくださいました。このような話があります。ある人が教会に通っていましたが、イエス様の話を聞いていましたが、どうしても受肉のことが分かりませんでした。なぜ神が人になることができるのか？そして、どうして人になる必要もあるのか？と思いました。クリスマス礼拝の時、雪が降っていました。他の家族は教会に行きましたが、自分は家に残って新聞を読んでいました。

雪は激しく降り、風吹となっています。そこに窓のところに、ドスン、ドスンという音がしました。何かと思って見てみると、なんと鳥でした。この雪風吹の中、避難するところを捜していたのです。あまりにもかわいそうになって、彼は表に出て、家の敷地にある納屋を開けて、そこに入るように誘導しようとしていました。けれども、一向に来てくれません。食べ物をこぼして、納屋までこぼしていき、おびき寄せようとしていましたが、それでも来ません。いろいろな方向に飛んで行くのですが、納屋のほうには来ないのです。おそらく、自分が人間だから怖がっているのだろうということが分かりました。そしてその時に思ったのです。「私が鳥になったら、誘導できるのに。」彼はその時に、受肉の意味が分かりました。神が人となることによって、人と一体になることにより、人をご自分に導くことができます。私たち人間は、人となられたキリストによって父なる神に導かれることができます。

2A 罪から救われる方(贖罪)

そして、神が人となられた目的の三つ目は、「罪を救うこと」です。マタイ1章をまた見てください。21 節です、「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」イエスのヘブル語はヨシュアです。モーセの後を継いで、イスラエルの民を約束の地に導いたヨシュアです。ヨシュアは、イエホシュアの短縮形で、「ヤハウエは救い」つまり「主は救い」という意味です。ヘブル書 2 章 17 節にこうあります。「神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。」

イエス様は私たちの重荷を負ってくださいました。ご自分が肉体を取られることによって、私たちの人生の中で受ける苦しみをすべて負ってくださいました。人の負っている重荷で最大のものは、その人の罪です。天地を創造した神から目を逸らして、自分自身で生きてきた罪です。そして、神のおきてに対して背いてきた罪です。この罪の縄目に捕えられている私たち人間を解放するために、ご自身が血と肉を持ち、その肉体において神からの処罰を受けられました。かつて、ユダヤ人は牛や羊を罪のためのいけにえにしていますが、神はご自分の子を体を持つようにさせ、その体をいけにえとして捧げるようにされたのです。

イエス様は、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタイ 11:28)」と言われました。イエス様のところに来てください。そして人生のすべての重荷、ことに自分の罪をキリストが負ってくださったことを認めて、この方の

ところに来てください。体の休息も大事ですが、イエス様は魂の休息を与えることができます。

3A ユダヤ人の王(選ばれた方)

そして、冒頭で読んだ本文に戻ります。

1B 東方(呪われた地)

1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」

ルカによる福音書では、ローマ皇帝が住民登録をせよとの命令を出したので、全住民が自分の生まれ故郷に戻らなければいけませんでした。そのためにヨセフの故郷ベツレヘムに行きました。ローマには皇帝がいますが、ローマによって任命を受けたヘロデという人物がいます。彼はユダヤ人ではなくイドマヤという、エドム人でした。けれども、この地域をユダヤ人の王として支配していました。

そこに東方からの博士たちが来たのです。博士というよりも「賢者」と訳したほうが良いです。占星術もするような人たちで、東方の国では、そのような者が王の側近として働いていました。今で言うならば、政府の首相に助言を与える顧問というところでしょう。そのような地位の高い人たちですから、エルサレムに来た時には政府代表団のような威厳と力をもってやって来ました。そして、ユダヤ人の王であるヘロデに向かって、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」と尋ねたのです。道理で、ヘロデもエルサレムにいる者たちも恐れたわけです。

「東方」というのは、イスラエルからの東ですから具体的にはメソポタミヤ地方のことです。今のイラクやイランのほうからやって来ました。そして聖書というのは面白い書物で、一つの言葉が数多く出てきて、そこに一つの意味合いを持たせています。東からの風は、必ずと言ってよいほど作物を枯らせたり、水を干からびるようにさせます。ヨセフが見た夢は、東からの風で枯れた七つの穂が出てきました。モーセがパロに対峙している時、エジプトに対する災いとして、東風によっていなごを神は運んできました。そしてイスラエルが渡るために紅海が分かれる時、東風によって海底が見えました。ヨナ書では、ヨナがとうごまの木の下でニネベの町を見ていた時に、熱い東風を吹かせたので、とうごまを枯らせてしまいました。

これは物理的に、水気の全くない砂漠からの熱風のことを指しており、イスラエルにおいて吹いてほしくない風はこの風で、ただでさえ暑いのに風が吹くと死にそうに暑くなります。けれども、それだけでなく、東からのものは災いをもたらすものという意味合いがあります。

そして創世記に、人が 罪が入り込んだのは東にあるエデンの園においてでした。そこに蛇がエ

バに現れて、彼女をそそのかし、それからアダムが、神が食べてはならないと言われた木の実を食べて罪を犯しました。そして、彼らはエデンの園から出ていきましたが、生まれた息子にカインとアベルがいます。カインがアベルを妬んで、弟アベルを殺しました。それから彼は親許を離れ、さすらいの人となりました。そして創世記 4 章 16 節に、「カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。」とあります。そこで文明が発達しました。けれども、そこは暴力に満ちたおそろしい社会になりました。

そして洪水の時に、そうした悪に傾いた者たちを主が滅ぼされます。しかし、その後に出てきた子孫でニムロデという人がいました。彼は権力者であり、次々に町々を征服しました。そこが、シヌアルというところ、アシェルというところ、今のイラクやイランのところです。そして、人々が東のほうから移動してきて、シヌアルという地でバベルの塔を建てたのです。そこが、天の万象を拝む星占いが始まりました。このようにして神に反抗しました。

後に、この地域からアッシリヤという大国が台頭します。そしてイスラエルの民を捕え移します。その後にバビロンが台頭します。そこで南に住むユダの民を捕え移します。彼らは、かつてのバベルの塔と同じように占星術をして国の動きを決定していたのです。

そして、終わりの日は、東からの王たちが、かれたユーフラテス川を渡ってきます。そしてメギドというイスラエルにある地域に集結します。ここから神とキリストに反抗すべく、全世界の軍隊が戦いを始めるのです。ハルマゲドンの戦いです。そこで悪魔や反キリストの口から汚れた霊が出てきて、その汚れた霊どもが王たちをメギドに誘導することが書かれています。

そのような地域から、なんとキリストをあがめたいという人々が現れたのです。だから、驚くべきことなのです。神に呪われ、神に反抗し、神に滅ぼされるという意味合いを持っている人々が、むしろ神の民とされているエルサレムの住民よりも、キリストを求めていたということになります。

2B 賢者(信じる者)

先ほどの話に戻ります。バビロンという国がエルサレムを滅ぼしてユダヤ人を捕虜にした時に、そのような暗黒時代に、一つの光が灯されていました。ダニエルという神に愛されたユダヤ人です。彼はバビロンの王に仕えて、また彼は夢を解き明かす力を神から与えられていました。占星術をしても決して解き明かせなかったバビロンの王の夢を彼は解き明かしました。彼は王の信頼を得て、ついにそのような賢者たちの長になりました。そして、キリストが来られることの預言も行いました。そのような暗闇の時代においても、むしろその中にいる人々に光を示すことができた証人がいたのです。そして、もしかしたらそうした知識が語り継がれてきて、占星術をしなごらなかつ、メシヤが到来するというしるしを見つけたのかもしれない。

私たちはとかく、自分の環境によって運命が決まると思っています。出自が悪い人は、その影響

が強く幸せな生活ができない。そしてクリスチャンになるのも、自分の周りにクリスチャンもいないし、キリスト教とは無縁の生活をしてきた、という人たちがいるでしょう。いいえ、東方からの賢者は言うならば、もっともキリストから離れていたはずの人々だったのです。そして、もっともキリストに近づいていたはずの人々、今の時代に言い換えるなら教会に何度も来たことがあり、周りはクリスチャンの人でも、キリストに出会わないで一生を過ごすことも十分にあるのです。使徒ヨハネは、こう言いました。「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネ 1:11-12)」東方からの賢者はこの方の名を信じたのです。反面、エルサレムにいた者たちは受け入れませんでした。

3B 導く星(希望の栄光)

そして彼らは、ベツレヘムに導かれました。「9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。」星が彼らを導きました。これは彼らにとって、希望の星であり、希望の光でした。昔、バラムという、これまた東方からの呪い師がキリストについて預言していました。「ヤコブから一つの星が上り、イスラエルから一本の杖が起こり・・(民数 24:17)」私たちがこの方に希望を置いているなら、この世の中がどんなに暗くなっても、事実暗くなっていますが、輝くことができるのです。使徒ペテロが言いました。「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。(2ペテロ 1:19)」

4B 礼拝(力と富の移譲)

そして彼らは、幼子イエスを礼拝し、贈り物を渡します。当時は贈り物を渡す行為は、相手を王として仰いでいること、その王に服して、仕えることを意味していました。東方からの賢者が、その大きな権力と富があるにも関わらず、その幼子にひれ伏したのです。イザヤ書には、再臨のキリストに諸国が贈り物を持ってくる預言があります(60:11)。けれども、力と栄光に富む再臨のキリストではなく、幼子キリストに同じ礼拝の姿勢を見せました。

私たちはどうでしょうか？キリストは、私たちに信じることを強制しません。それはあたかも、小さな幼子が大人の私たちに何も強制できないのと同じです。しかし、その人になられた、弱く、小さくなられた方に自分の生活の全てを捧げるといふ礼拝をするのです。皆さんは、どのような声を神から聞いているのでしょうか？その声は小さく、優しいものです。無理やり強いるような声は、神からのものではありません。むしろ、自分の痛みや弱さ、何よりも罪に対して、愛をもってそれをご自身の体に受けたのだという声の本物です。この方にひれ伏してください。幼子にさえもひれ伏すような自発的な礼拝こそが、真実な礼拝です。